

未来への教訓

復興！ 大津波の記憶を風化させない

平成27年(2015年)
～ 地元報道より ～

11月の出来事

南三陸町

◇秋の叙勲で本吉・気仙沼地区からは5氏が受賞した。南三陸町からは歌津吉野沢の小野忠一郎氏(78才)が消防功勞の「瑞宝単光章」に輝いた。石泉地区で畳店と農家を営み、21歳のときに歌津村消防団に入団し、平成12年に歌津町消防分団長となった。42年間地区の防火防災活動に尽力した。

◇1日「南三陸産業フェア」が開催され、南三陸町の農水産品などをPRした。今年は合併10年記念として多彩な催し物でにぎわった。地元のとれたてのホタテ焼きが1個200円や、蒸しカキを3個入り300円で販売され、南三陸の海産の名物の味わいを提供し、復興への実感を共に味わった。

◇県文化の日の表彰に気仙沼・本吉地区で8氏が栄誉に輝く。南三陸町からは、入谷地区の高橋貞喜氏(65才)で、高貞菓子店のかたわら、40年間にわたり消防団員として地域に力を注いだ。震災では全国からの緊急援助隊の町内の受け入れ調整に尽力した。

◇3日南三陸町の合併10周年記念式典がベイサイドアリーナで開催され町民など関係者300人が出席した。佐藤町長は「創造的復興へ」の挑戦の誓いを新たにされた。

◇南三陸町の委託を受けた環境関連会社のアマタ(本社東京)のバイオガス施設を、4日パラオ共和国のコロール州のヨシカカ・アダチ州知事ら5人が、先進地視察に来町した。人口規模や主要産業も観光と「エコタウン友好都市」の締結も提案された。

東日本大震災で被災した「志津川魚市場」の復旧工事が順調に進んでいる。新設される市場は衛生面に徹底した配慮をし、車両の進入禁止となる。床面積は6435㎡で、荷捌き棟・製氷機械室・排水機械室の3棟で構成する。昨年度の金額は約20億8千万円となり、震災前の水準まで回復し、今後はサケとタコの水揚げ増加を目指す。

◇8日南三陸町で「総合防災訓練」が開催され、名足災害公営住宅などの出火も想定し、バケツリレーなどが実施された。万一の複合災害も対応や備えとして、町民・陸上自衛隊・消防署などが参加し防災訓練をおこなった。

◇南三陸警察署でオクトパス君をモチーフにしたキャラクターを作成した。名前は「オクトポリス君」で、今後は交通安全で開運グッズを配布する。

◇南三陸町で初心者パソコン講習が、気仙沼サポートセンター主催で11月18日に、総合体育館で開催された。

◇「復興グルメF1大会」が15日ベイサイドアリーナで開催された。被災三県での出店ながら今回で11回目を迎える。

南三陸町の養殖カキの国内初の国際認証「ASC」の取得のため、戸倉地区の養殖施設で公開審査がおこなわれた。ASCは民間の国際認証機関で、水産養殖管理協議会(本部オランダ)が、持続可能な栽培に取り組む養殖業を認証する。審査は、国内の認証審査会社「アマタ(東京)」が実施し、東海大の秋山教授、気仙沼水産試験場の山内主任検査員や審査員が、養殖いかだや処理施設、漁業者からの聞き取りをした。海外の国際会議などでの料理は、認証水産物が優先的に使われる。2020年の東京オリンピックなど、カキの国際認証による販路拡大や、海外も視野に南三陸産カキをアピールしていく。まずは、戸倉地区の養殖カキを首都圏への取り組みを強化していく。

◇南三陸町の志津川地区の高台の住宅再建進む。

病院・役場エリアの東工区では15戸を整備し、6月末に地区内第一号として土地の引き渡しが行われ、現在、住宅の着工が相次いでいる。

◇志津川深田の菅原倉鳳(そうほう) = 本名・弘人さん(34)が、日展で県内から2人の入選の内の一人に入った。22歳で師範となり、税理士事務所で勤務しながら、志津川の実家で週末は書道教室を開いている。

◇志津川市街地の災害公営住宅で、集合住宅の東(11戸)・中央(2戸)・西(7戸)と、一戸建て中央(1戸)・西(1戸)の合計32戸を再募集する。

◇宮城県は南三陸町の防災対策庁舎を、20年間の43年まで、「県有化」の保存に向けて安全対策の検討のため、来月にも現地調査に入る。

◇志津川地区に街路灯20灯が寄贈された。東北電力気仙沼営業所とユアテック気仙沼営業所が、「安心安全なまちづくり」にと、志津川黒崎の45号と戸倉398号に設置される。

◇志津川高校の郷土芸能愛好会は、「水戸辺獅子踊」を県大会で披露し、最優秀賞を受賞した。来年7月の県大会へは、3年生が卒業し1・2年生の体制で挑戦する。

◇南三陸町社会福祉協議会では、志津川地区の災害公営住宅内に、デイサービスなどを行う「福祉モール」・「カフェ」などを設け、高齢者世帯の入居希望が多い団地に、安心安全な住環境づくりを目指す。

◇南三陸町は河川に遡上するサケが激減していることから、20日から町内の定置網漁業者による網揚げを実施した。親魚確保にサケ孵化事業の関係者は期待している。

◇気仙沼線の復旧問題は、南三陸町と登米市がBRTでの本格的な復旧を容認する方針だが、気仙沼市とJR東日本の協議が難航し年を越えそう。気仙沼市はBRTの振興策が条件として求めている。

◇南三陸町は、公民館と図書館を併設した「生涯学習センター」を、志津川地区の中央区への建設を、町議会に示した。3階建てで、講演会・軽スポーツ・音楽発表会などが可能で、200人規模の多目的ホールを設ける。29年前半の着工を予定し、30年12月に供用を開始する。

◇第三次安倍改造内閣で、復興大臣となった高木大臣が、初の気仙沼・本吉地方入りをし、復興の状況を視察した。南三陸町には24日訪れ、「復興は道半ば、これからも町に寄り添って支援していきたい。」と語った。

◇南三陸病院と総合ケアセンターの落成式が25日に、現地の志津川沼田に関係者150人が出席し、式典が開催された。新たな医療拠点として12月14日に開業を迎える。

◇南三陸町の志津川郵便局において、年末年始の繁忙期を前に、強盗事件を想定し、万が一に備え訓練をおこなった。

◇今月の南三陸町「志津川福興市」は、29日に「鮭・イクラまつり」を実施する。震災後から開催を続ける「福興市」は今回で51回目を迎える。

◇南三陸署で結成された「よりそい隊」は、高齢者への「振り込め詐欺」の被害防止を、仮設集会所などを利用し、寸劇・腹話術で犯罪から高齢者を守っている。親しみやすい「よりそい隊」の活動が好評を得ている。

県漁協歌津支所青年部が、ウニの蓄養に取り組んでいる。磯焼けの原因の海藻を食べるウニを駆除し、沖合に設置した「かご」で育てる。えさはノルウェーで開発された人口飼料を使用する。身入りも効果が確認され、一年通した生産を視野に蓄養で売れるウニに期待されている。

◇南三陸町の「震災復興祈念公園」の開園目標を29年度とし、12月20日午後10時30分からベイサイドアリーナで説明会が開催された。

◇震災後復旧のほ場整備地区で気仙沼・本吉地方のJA南三陸のネギ栽培が今年から始まり、ブランド・特産化「ネギ」として大谷地区で収穫がスタートし、生産者は新しい特産品ネギに期待を膨らませる。

◇南三陸町総合計画審査会(会長 佐々木憲雄県

漁協志津川支所運営委員長)は、27日町から諮問されていた来年度からの第2次総合計画を諮問通り答申した。これで南三陸町の向こう10年の総合計画により移住・定住などを柱に、復興後の将来象を定めた。

南三陸町歌津地区に東日本大震災から都内のボランティア団体が主催する、応援ツアーが今月で100回目を迎えた。主に泊浜地区を中心に、復旧・復興支援を続けてきた。その記念として「手作りの感謝状」を、受け入れに協力してきた平成の森仮設の渡辺正行さんが、津田代表(横浜市)に贈った。

南三陸町と気仙沼市の復興の進捗と問題を比較して見れます。

気仙沼市

◆UR都市機構気仙沼復興支援事務所の「復興まちづくり事業者エントリー制度」が実施されている。鹿折・南気仙沼地区の地権者との土地利用マッチングに苦戦している。これまで2地区で成立が3件のみと、将来不透明や用地地点がその理由としてあげられる。

◆気仙沼コールセンター分が2936万円の不適正支出と、6日厚生労働省の緊急雇用創生事業を受託したDIOジャパン関連子会社の、不適正支出を発表した。全国では4億円にのぼる。気仙沼市からは事業受託した24・25年があり、昨年度は3300万円を概算払いしており実質差し引き2300万円となり、合計で5200万円の返還を求めている。DIOは破産しており、返還は見込めなく、事業の基金を造成した県に財政支援を要望している。

◆気仙沼市の小泉川のサケ漁は9日まで666匹ながら、親魚が少なく前年同期の6分の1で、震災で放流数の減少の影響が出ていて「採卵」が厳しいシーズンとなっている。

◆気仙沼市で気仙沼線・大船渡線の「復旧を求める住民集会」が8日中央公民館で開催され、約120人が集まった。BRT(バス高速輸送システム)の復旧方針について、鉄道を諦める事なく、一丸となり取り組んで行く事を誓った。

◆気仙沼市の湾内区画整備事業で、宅地引き渡しに最長2年遅れ(30年度)となり、町づくりへの影響が懸念される。市全域で災害公営住宅160戸、防災集団移転でも54区画の追加募集をする。(平成27年11月)

◆気仙沼市の防潮堤建設はL1対応で107カ所、原形復旧工事は現在の所9カ所しか完成していない。

◆気仙沼市の震災がれき処理場の一次分が5年目でようやく処理が終わった。がれきは198トンで、処理総額は1117億円がかかり、がれき処理場は今後農地として復旧される。

◆気仙沼市は昨年の人事院勧告により、職員給与や特別職(市長)などが引き上げとなる。

◆気仙沼市の緊急雇用は28年度で終了となる。気仙沼市の臨時職員など54事業、236人を27年度に雇用し、予算は当初より6割削減され4億3千900万円だった。緊急雇用は23年度から10～13億円を予算化してきた。

◆気仙沼西高校は、県主催の「高校生弁当コンクール」で、4年連続で県知事賞に輝いた。気仙沼の食材をふんだんに使った、「幸せもどるほっこりふるさと弁当」の優秀賞1点など、年度内にコンビニで商品化される。

気仙沼市の市町村合併による、普通交付税の特別処置「合併算定替え」の終了となり、段階的な減額が始まった。当初は年間12～13億が減る想定が、4～5億の減額で済みそう。普通交付金が23年度は99億円に対し、33年度は82億円まで落ち込む。今後進む人口減少による大幅な落ち込みを踏まえ、財政規模に見合った市制運営が求められる。

◆気仙沼港の「生鮮カツオ」の水揚げが9年連続で、「日本一」を達成した。水揚げは2万2600トンで、2位の千葉勝浦に6千トンの差をつけた。